



一本の庭木が 偲ばせてくれたこと

きたの だいち

庭木の移植はなかなか骨が折れる。華奢に見えても、奔放に張り出された根は大地をしっかりと捕らえ、容易には掘り起こせないものだ。

◆
思い立ったが吉日というが、その時分にはたいがい緑が深くなっている。スコップを片手に、流れる汗を軍手の甲やシャツの袖で拭いながらの作業は羽子板遊びの、さながら負けゲームを連想させる。ことに悲惨なのは眼鏡使用者だ。額や頭からの汗が眉毛のあたりで一旦ダムを作り、それが堰を切って一挙にシズ上を突っ走り、視界不良を招くが、腰にぶら下げた手ぬぐいは既に汗を引き延ばすしか芸が残っていない。

暑い盛りは移植の適期ではない。この時期では樹勢をそぎ、こじらせてしまう。計画的に根回しを施せばさほどのこともないのだが、怠ると丁寧にさばいても根を素っ裸にしかねない。『根回し上手?』も、我がこととなるとその語源

すらも忘れてしまっているようだ。

◆
芝生に寝転がりゆったりと流れる雲を眺めながら、先人たちのことを思い浮かべていた。大きな不安を抱えつつも、それをしのぐ夢を描きながら北海道の開拓に挑んだ人たちは、いかな千辛万苦に遭遇したものが。たかが幼木の移植がごときで難儀している者が軽々しくは語れないのだが、汗だくになり肩で息をしている姿は何よりも雄弁だ。

◆
そのように思うのも祖父が明治三十五年、二二歳のときに十勝に入植したからである。祖父は明治十三年に岐阜の稲葉郡で生をうけた。次男だったことから大工に弟子入りし修業していたが、次第に新天地に鋤を下ろす決意を固め、母親と二人で渡道した。

◆
たどり着いたところは、十勝川支流の河川沿いだった。川は大きく蛇行し弧を描いた内懐に二〜三ヘクタールの用地



徒然 つれづれ

を求めた。そこは鬱蒼たる森林、大人でも抱えきれないほどの太い楡の木が林立していた。機械力はおろか畜力さえもなく、用具は鋤と鋸だけだった。繁茂のほどは定かでないが、農耕地を求めての作業は巨木の枝打ちから始まった。切り倒しても巨体が横たわっていた。しばらくの間は、寝そべる大きな図体や切り株との同居生活を余儀なくされたのだろう。太い幹を切断し運び出しはじめたのは四〜五年経って馬を入手してからだ。降雪を待って引きずり出したに違いないが、なおも、切り株がどつしりと構えていた。本格的に掘り起こし始めたのは、さらに時を経てからであり、戦後になってもその名残をとどめていたほどである。

◆
わずか一本の庭木が、一世紀も前のことを偲ばせてくれた。先人たちは大いなる挑戦をし、原始の森を切り開いた。そして、稔り豊かな大地を残した。

感慨に浸りながらも、「我々は何を残せるのだろうか？」と脳裏をよぎった。指示待ち人間が多いと揶揄されるいまどきのこと、ことさらその思いが強い。



■ ■ ■
特別寄稿をいただいていた碓田素州さんが、一時充電期間をとることとなりました。食文化にかかる数々の話題を提供いただき、毎回次号を楽しみにしていた読者の方も多く残念ですが、再登場に期待しましょう。

今回から、「つれづれ」という新コーナーで、きたのだいちさん、八坂里四さんに代わる代わる寄稿いただくこととなりました。おたのしみに。